

注目の商店街

商業の集積に加え、地域コミュニティの拠点としても注目される商店街。横浜市内には、店主らが経験と知恵、アイデアを駆使し、消費者を引きつけている数多くの商店街が存在する。地域特性に着眼した活性化策を展開する市内3商店街（本牧リボンファンストリート商店会、弘明寺商店街、六角橋商店街）を紹介する。



「お年寄りに優しい街」を掲げるのは、横浜市神奈川区の六角橋商店街。東急東横線白楽駅の改札を出てすぐ、個人商店を中心とした約170店舗が建ち並ぶ。昭和の面影を残す昔ながらの商店街が見据えているのは、日本が直面する超高齢社会のモデルとなる地域コミュニティの形成だ。

4商店会で構成する六角橋商店街連合会が旗を振り、地域ケアプラザ、地元にある神奈川大学の学生らが参画する高齢者支援の総合的な取り組み「オレンジプロジェクト」がスタートしたのは3年前。

今年は同区内の医師会、歯科医師会、薬剤師会の医療3団体も協力。9月の期間中、認知症サポーターの養成講座をはじめ、高齢者

街全体で高齢者支援



医療のセミナー、認知症予防の体操教室といった多様な催しが繰り広げられた。

同連合会の石原孝一会長（60）は「毎日、日常的に高齢者に接している商店主にこそ認知症サポーターになってほしい」との思いがあった」と話す。商店街で目立つのは「神奈川区 みまもり協力店」と記されたオレンジ色のステッカー。同商店街の活動などが契機となり、店主またはスタッフがサポーター講座を受講した店を区が認定し専用ステッカーを交付する制度が20

17年にスタート。同商店街の認定店は全体の3分の1を超え、街全体が「みまもり商店街」に。

同商店街が大きく発展したのは戦後、昭和20、30年代。平成に入り、当時開業した店主の高齢化が進む中、夜間にフリーマーケットやライブパフォーマンスなどの催しを展開する「ドッキリヤミ市場」などにぎわいをつくり人を呼び込む活性化策をいち早く実施。自力で課題を乗り越えてきた。

の本質は、認知症高齢者に対する理解、支援を通じて違いを受け入れ、共生し、互いを尊敬しながら一緒により良く生きていける社会をデザインすること。石原会長が目を見張るのは、プロジェクトに携わった学生の意識の変化、成長だ。

「人のためになる活動を当たり前のこととしてできる学生を見ていると、超高齢社会の山積する問題を乗り越えられる新しい日本人像、可能性が見えてくる。」

石原会長は微笑む。

（宮崎 功一）



認知症高齢者みまもり協力店の認定店舗に掲げられるステッカー

認知症高齢者を守る取り組みを進める六角橋商店街連合会の石原会長＝横浜市神奈川区

カフェ作り情報発信



本牧通り沿いに約40の店舗が集う「本牧リボンファンストリート商店会」（横浜市中区）。1958年に設立された「本牧リボンファンストリート」を起源とする。同会は主に、商店会のスタンプ事業を担ってきたが、2010年にスタンプ事業を見直すとともに現在の名称に変更した。

「1989年に開業した郊外型の複合商業施設『マイカル本牧』も影響があった。閉店する店も出た。商店会で会長を務め、呉服店を経営す

る羽生田靖博さん（61）は説明する。「近年はインターネット通販の台頭で、来店者や販売機会は減った」と続ける。

そこで、商店会の情報発信を目指し「HOMMOKU BASE（ホンモクベース）」と呼ばれる、誰でも立ち寄れるコミュニティカフェを2018年4月にオープンさせた。数年前の中区役所のニーズ調査で市民が商店街に行か

ない理由に「バリアフリー対応でない。授乳室がない」との意見が挙げられていたことから、授乳室を備えたバリアフリーのカフェとした。羽生田さんは「来所者の中で商店会に新たに足を伸ばしてくれたり、町内会へ入会してくれたりする人もいた」と話す。

▲本牧リボンファンストリート商店会会長（左）と副会長（右）＝横浜市神奈川区



▲商店会の中心に立つコミュニティカフェ「HOMMOKU BASE」＝横浜市中区

また、商店会をPRする50ページの冊子を作製。商店会の店主にスポットを当て加盟店を紹介している。

さらに、カフェの中にはコミュニティFM局「横浜マリンFM」が今春開局する予定だ。本牧出身で、地元で音楽関係の仕事に携わる笹原延介さん（52）は「本牧は海が近く、崖も多い。災害はいつ起こるか分からない。災害時の情報発信はもちろんだが、地域活性化にも役立ちたい」と開局の意義を話す。

横浜大空襲や第2次世界大戦後の米軍による接収など、ここ数十年間で激動の時代を経験した本牧地区。羽生田さんは「本牧は外国人の居留地が多く、数々の『日本初』が残るエリア。ほかの地域に比べ地域資源にも恵まれている。本牧生まれの四角いピザや本牧神社の小麦を生かした『本牧サブレ』など特性を生かした商品でPRしていきたい」と意欲を見せている。

（鈴木 崇宏）